

東京マラソンと日本
—メディア報道を中心に—

清水 泰生*

The Tokyo Marathon and Japan
— **Media Coverage** —

Yasuo Shimizu*

Abstract

The Tokyo marathon has become the first full-scale urban marathon in Japan. People who previously took no interest in running have begun to show interest in the Tokyo marathon. Thus a second running boom is now taking place. This is different from that of the late 1970s because the media covers marathons on a large scale. I would like to consider how Japanese running culture has been built up by the media and how the culture has penetrated Japanese society. The results are as follows.

Newspapers covered ordinary participants and citizen runners in the Tokyo marathon and spotlighted them. Family ties was seen in the newspaper articles, and such words as Thanks, thank you and supporting appeared frequently. These words may be closely connected with the fact that marathons are extreme and that no one can run without the support of other people. They may also be connected with Japanese gregariousness and bonding.

キーワード

東京マラソン メディア 市民ランナー 言葉

1. はじめに

最近、日本では東京を中心として第二次ランニングブームが起こっている。そのブームに大きく貢献しているのは東京マラソンであろう。今まで、日本で大都市での公道を使ったロードレースは交通規則等の問題があって、道路所有率の短いエリートレース（福岡、びわこ毎日、別大など）のみが開催されホノルルマラソン、ロンドンマラソンなどのエリートランナーと市民ランナーが同時に走る都市型マラソンは実施されなかった。それらの問

*しみず やすお：大阪国際大学非常勤講師（2014.9.25受理）

題を克服し日本最初の本格的な都市型マラソン・東京マラソンが2007年に始まった。ランニングに関心のない人まで東京マラソン、マラソン、ランニングに興味を持ち出した。そして、今、ランニングブームである。今のランニングブームは1970年後半のランニングブームとは明らかに異なりメディアが大々的に取り上げている。本考察はメディアを中心に東京マラソンによって、日本のランニング文化がどう作られ社会に浸透してきたかを見てみたい。

2. 日本のランニング史について

日本の市民マラソン史について少し触れてみたい。市民マラソン史について山中（2010）は次のように分類している。

① 発生期

1970年代に入り、青梅マラソンなど、参加者に資格制限をしていない大会に、ごく少数の高齢者ランナーが参入。以後、1975年の熊本県の天草パールラインマラソンの新設を受けて、専門雑誌ランナーズが登場する1976年までの段階。¹⁾

② 成長期

ジョギングブーム、ランニングブームという用語が使用されはじめ、兵庫県の篠山マラソンなど関東、九州に比べ市民マラソン大会や市民ランナーが少なかった地域でも、大会の開催や、ランナーの増加が見られた段階。

第一次ランニングブームと呼べる時代に突入したと言える。1977年頃から、1980年代半ば頃が該当する。この時期には瀬古選手らの活躍、ロス五輪で初の女子マラソン種目採用があり、それに先立ち1979年に東京国際女子マラソン、1982年から大阪国際女子マラソンが開始されるなど、今日の東京マラソンのように、エリートレースに市民ランナーの幅広い参加を認めるまでには至らなかったものの、走ることへの関心や、大会開催の機運が高まっていった時期である。

③ 安定期

1980年代半ばから1995年代半ば頃まで。ランニング人口自体は横ばい状態になったが、バブル経済、バブル経済崩壊以後も、行政やスポンサー企業のランニング大会への補助はすぐには減少しなかったため、大会開催は、微増傾向は続いた。

④ 低迷期

1990年代半ばから2006年まで。景気低迷の深刻化や、関西地区では阪神：淡路大震災で阪神地区での大会開催の中止。それ以後は市町村合併による大会開催の中止が相次いだ。

さらに発生期、成長期のランナーの高齢化による離脱や、市民マラソンでの3kmファミリー部門などが、少子化の影響で参加者が減り、第1次ランニングブームとその余韻が続いた時期が終焉した。

⑤ 再生期

2007年の東京マラソン開催が決定した、その前年の2006年あたりから今日まで。ランニングに関する情報量の増加、実際に東京マラソンが実施されたことの影響が各方面に波及

し、ランニング大会の参加者、大会開催数の増加。既存大会の制限時間の緩和による門戸拡大が相次いでいる。

3. マラソンTV史

TVがマラソンをどう扱ったかについてみてみよう。

TVは、主にエリートマラソンのみ放送され、福岡国際、びわこ毎日別府大分毎日マラソンに関して競技者主体の放送であった。エリートと一般市民ランナーが走る大会がないのでそうであるのは自明な事であろう。また、第一次ランニングブームの時には、宗兄弟、瀬古利彦の活躍、その後1980年中盤から中山、谷口の台頭によってメディアが強いマラソン選手を映し出して、そのヒーロー像を描いているように見える。一方、第二次ランニングブームのメディアは、市民、視聴者参加型のものだといえ、メディアに出てくる言葉・内容にもそういったことが反映されている。このことについては後で詳しく述べる。

スポーツ番組ではなくて、芸能番組でマラソンはどう扱われたのか。ホノルルマラソンに70年代後半に『火曜ワイドスペシャル』の中で毎年の恒例として「ドリフのホノルルマラソン」が放映されたが、他の番組に影響を与えるまでには至らなかった。他のスポーツも『アイドル水泳大会』くらいで、視聴者を巻き込む番組、つまり視聴者参加型のスポーツ中継はほとんど見られなかった。しかし、1980年代に入ると「ビートたけしのスポーツ大将」の番組が行われ、ビートたけしが率いるたけし軍団が一般人、スポーツ選手と野球などの対戦をする番組が起り、いわゆる視聴者参加型番組がおこった、そして、1990年代に入ると、大きな変化があった。92年には、「24時間テレビ」のチャリティーマラソンがはじまり、初代ランナーの間寛平が、孤独で、暗くとっつきにくいイメージの強かったマラソンランナーを、明るく親しみやすい人に変えた。²⁾

そして、1993年に『オールスター感謝祭』(TBS系)の人気企画「赤坂5丁目ミニマラソン」がはじめて放映された。タレントが大勢参加する中、増田明美や谷川真理、さらにはエゴロワ、ワイナイナなどの新旧のトップアスリートたちも参加した。そして、ライブ感覚の放送で、マラソンが、さらに親しみのあるものにしたと言える。また、今、タレント芸能人等の多くの人が市民マラソンにゲストランナーなどで出ている。猫ひろし、森脇健二、長谷川理恵(女優)、日本テレビ等の女子アナウンサーが走り、その人物を追っかけてTV、新聞、雑誌、ネット等で大きく取り上げる。³⁾

1990年代前半に市民ランナー出身谷川真理の活躍、2000年の高橋尚子のオリンピック金メダルから女性がマラソンを走ることに対して抵抗が無くなりさらに、長谷川理恵(2000年にホノルルマラソンが初マラソン)、安田美沙子などの女優やアナウンサーが走りそのことが雑誌、テレビ等で報道されることで、女性が走ることで美しくなり、美容、健康によいものだと認識されるようになった。また、そのような、それらのタレントを通してマラソンは美容と健康によいという報道の仕方が行われている。⁴⁾

タレント以外にも鈴木宗男元衆議院議員、東国原元知事などの政界関係者、村上春樹なども市民マラソン大会にでて市民と走り、TVや一般紙、スポーツ紙に登場したこともマラソンが身近なものになり人気が出てきた要因だと言えよう。⁵⁾

4. 東京マラソンについて

東京マラソンが、なぜ生まれたかについて述べてみよう。東京マラソンの前身東京国際マラソンは、1981年2月に「読売日本テレビ東京マラソン」として開催。その翌月、「東京-NY友好マラソン」（フジサンケイグループ主催）が行われたが、翌年両者が統合され偶数年を読売新聞社主催で、奇数年を産経新聞社主催で行われていた。2007年から本競走と市民マラソン大会の東京シティロードレース（東京新聞主催）をまとめる形で「東京マラソン」が行われるようになった。（三新聞社共催の形になった）

欧米では、五大マラソン（ロンドン、ボストン、ニューヨークシティー、シカゴ、ベルリン）のように、エリートランナーと一般市民が走る都市型マラソンに行われていたが、日本では行われていなかった。そんな中、日本で都民を中心とした市民ランナーでは都心部の公道を使用した大規模なマラソン大会を希望する声があり、その実現を願って市民主導のNPO法人主催による、市民マラソン大会「東京夢舞いマラソン」が2001年から実際に行われてきた。その願いを「東京マラソン」という形で実現させる際に、石原慎太郎東京都知事（当時）が主導的役割を果たした。⁶⁾そして、石原は東京マラソンの実現にあたって東京オリンピック構想へのアピールも兼ねると述べた。

2007年2月18日、都市型マラソン東京マラソンが誕生。今年で九回目、年々参加希望者が増え、2014年東京マラソンの出場枠3万5千500人に対して参加希望者が303,386人であった。

5. 東京マラソンメディアガイドラインについて

東京マラソンには、毎年、マスコミに対して、このようなことは知ってほしい、何を報道してほしいかを示すガイドラインが書かれている。東京マラソンメディアガイドラインという。その中身は東京マラソンのコース紹介、大会要綱、招待選手のプロフィール、報道取材要領、取材エリアについて、東京大マラソン祭り、マラソンエキスポ、東京マラソンの展望、東京マラソンにまつわる数字（参加人数やボランティアの数など）などが出ている。この資料を基にメディアは取材、記事を書いている。本考察でガイドラインも参照しながら考察を進めていきたい。

6. 東京マラソンのコンセプトとコミュニケーションワード

多くのマラソン大会にはコンセプトがないが、東京マラソンは2008年大会から大会のコンセプト「東京が一つになる日」がコンセプトである。

すべての人のためのマラソンと祭りということで民族、国家、性、世代、価値観の異なる人びとが、東京マラソンを舞台として走る喜び、支える誇り、応援する楽しみを共有することにより一つになると言うことである。コミュニケーションワードは「走る喜び」（ランナー）「支える誇り」（スタッフ・ボランティア）である。テーマの例として環境、国際交流（観光都市）スポーツ推進（健康）チャリティー、ファッション、音楽、食品などである。これらのテーマに東京マラソンが関わろうとしている

以上述べたことを参考にして、メディアが東京マラソンの報道を展開していると考えら

れる。

7. 考察の仕方

以上の背景的なことを踏まえて、新聞、テレビを中心に考えてみたい。今回はエリートマラソン競技のレースについて言及しているところは出来るだけ扱わずにそれ以外のことについて述べてみたい。

なお、雑誌は、読売、朝日、毎日、産経各新聞の一般紙（データベース、産経を除く縮刷版（東京））について扱い、テレビは、全国放送版だけを主に扱った。⁷⁾

8. 結果

東京マラソンに関する記事は2000年1月1日から2014年8月31日現在、朝日、読売、毎日、産経、四社で3651件で（朝日703件、読売1037件、毎日799件、産経1112件）2000年から2006年までの記事は、各社ともマラソン開設に向けてのシンポジウムのことが紹介された。スポーツ、イベントの出来事をありのまま伝えることが新聞の任務であることとシンポジウム等が東京都主催なので、どの新聞社も扱っていると言えよう。

（1）2000年07月20日 朝日朝刊

東京マラソン実現へシンポジウム あす都庁で /東京

ニューヨークシティマラソンをお手本に、東京でも、都市全体を巻き込むフルマラソン大会を手作りで開こう——。そんな構想の実現に向けて、二十一日、都庁内でシンポジウムが開かれる。石原慎太郎知事も「素人や身体障害者が走って楽しめるものなら、賛成」と乗り気だ。

シンポジウム開催後、大会の2ヶ月ぐらい前では、青梅マラソンとの開催日の問題を取り上げて開催の日程上の問題点を述べている。

そして、第一回東京マラソン大会の直前について新聞社にそれぞれ取り上げ方が異なった。朝日は、「大封鎖」、など見出し等で取り上げ、否定的に報道をしているが、毎日、「陸の孤島」、読売は、「交通規制」「封鎖」の語が出ているが、毎日は、単に事実を述べ（（4）の下線部）、読売は、警視庁が対策を行っているなど否定的な報道ではなく、（むしろ肯定的に）淡々と述べ（（5）の下線部）、産経は2月17日の記事（しかし、（3）の下線部のように利点も述べている）以外、あまり心配していないようである。読売、産経に関しては、主催側なので否定的な書き方は出来るだけ避けていると思われる。一方、朝日は、主催者でないのと、新聞社の理念と石原東京元都知事の考え方が反対の立場（産経、読売は同じ立場）であることも関係しているかもしれない。

（2）2007年1月27日 朝日夕刊

（土曜フォーカス）都心「大封鎖」 東京マラソン、来月18日

銀座、皇居、浅草と、東京都心の観光名所や目抜き通りを約3万人が走る——。2月18日の日曜日に開かれる第1回「東京マラソン」だ。普段は走れないコースとあって、参加

の応募は定員の3倍を超えて抽選になり、国内最大規模の大会となる。ほとんどが市民ランナーだけに、ゴールまでの制限時間は7時間。主要道路は長時間にわたって「大封鎖」される。都心の機能はマヒしないですむかどうか。

(堀川貴弘、平井隆介、深津慶造)⁸⁾

東京マラソン構想は石原慎太郎都知事が03年秋に打ち出した。2016年の五輪招致を目指す都には、「東京の魅力を知ってもらおう絶好の機会。五輪招致に弾みをつけたい」との思惑がある。

スタートは午前9時すぎ。ただ、ゴールまでの制限時間は7時間。11月の東京国際女子マラソンの約2倍だ。沿道への影響は大きい。

(中略)

JR浅草橋駅前の通行止めは約5時間。軒を並べる人形店は3月の桃の節句を控え、かき入れ時だ。老舗(しにせ)・久月は「お客様に『この日は避けて』とも言えない」と困惑する。

銀座4丁目交差点はランナーが2度通過するため、封鎖は約6時間に及ぶ。日曜日には約10万人の買い物客が訪れる銀座三越の担当者は「歩道にも観衆が押し寄せるかも。店の出入り口の確保や安全誘導のため、警備員を増やさなければ」。都は、歩行者が地下道を使って道路を横断できるようにコースはなるべく地下鉄の上にしたという。

○走者3万 警備5000人

「どんなことになるのか全く見えない」「大事件が起きないことを祈るばかり」。警視庁の幹部は口々に不安を漏らす。

都心の要所の長時間封鎖は「初体験」(同庁幹部)だけに、交通部は昨年3月、16人で検討委員会を結成。警備やテロ対策も必要で、同10月には警備部や刑事部とも連携した特別対策委員会に格上げし、20人以上が専従になった。同庁はマラソン当日、過去最大の5千人態勢で臨む。

(以下略)

(3) 2007年2月17日 産経大阪朝刊

東京マラソン／走る文化醸成の始まりだ

(前略)

大会には9万5000人も応募があった。大都市の中心部を走ることへのあこがれ、一流競技者やハンディを持ちながらスポーツへの情熱を燃やし続ける選手など、いろいろな層の人たちと触れ合う期待感の表れだ。

(中略)

警視庁や大会関係これだけの人々が動くことから、コース周辺部には7時間に及ぶ交通規制が敷かれる者は幾度も会議を重ね、シミュレーションを行って対策を講じてきた。都市機能が寸断されてはならない。それでも、コース周辺住民の生活には少なからず影響が出るかもしれない。

懸念の声はある。しかし、国内初の試み、都市と市民参加型スポーツとの壮大な実験でもある。走る人とそれを支える人、沿道で声援を送る人だけではなく、地域の人たちの寛

容な盛り上がりこそ大会を成功に導く。

東京はニューヨークやロンドンなどの大都市マラソンに触発され、それらを範として実行に踏み切った。前者は毎年11月、後者は4月に行われ、4万人に及ぶ参加者を集める。彼らは思い思いに走ることを楽しみ、沿道は声援を送る人の波で埋まる。いや、都市そのものがその一日を「マラソンデー」としてお祭りに酔うのだ。

(以下略)

(4) 知りたい：東京マラソン、18日号砲 3万人、走る走る

2007年2月14日 毎日東京夕刊 1頁 政治面

<2007・チャンネルYou>

◇給水ボトル40万本、バナナ3万7000本、警察官5000人

世界のトップと市民ランナーと一緒に走る初めての東京マラソンが18日に迫った。国内レースではかつてない3万人のランナーが7時間の制限時間内でゴールを目指す。交通規制やランナーへのサポートなど、舞台裏はどうなっているのか。【木村健二、曾田拓、石井朗生】

(中略)

住民生活への影響もある。浅草の雷門東部町会＝約350世帯、長谷川浩会長(76)＝は四方の道路が5時間前後、横断も禁止という「陸の孤島」となり、住民は地下鉄や駐車場など地下通路を使つての移動を強いられる。

毎年この日に入試を行う慶応大商学部は午前10時に開始するが、三田校舎とJR田町駅の間の国道15号(第一京浜)が8時55分から通行止めとなるため、受験生に注意を促した。

(5) 東京マラソン18日開催 市民ランナー3万人 道路6時間半封鎖も

2007年2月10日 読売 東京夕刊

銀座や皇居外苑、浅草などを3万人の市民ランナーが駆け抜ける「東京マラソン」(東京都、日本陸上競技連盟主催、読売新聞社など共催)が18日に開催される。都心の道路を最長6時間半“封鎖”し、1万人以上のボランティアが運営を手伝うなど、国内のマラソン大会としては空前のスケール。都や警視庁では、号砲の直前までランナーの円滑な誘導や観衆の混乱防止に知恵を絞っている。

東京マラソンはニューヨークマラソンなどの海外の有名な大会にならって創設された。招待されたトップ選手と一緒に、国内外から参加する3万人がゴールを目指す。日本陸連の桜井孝次副会長は「せいぜい数百人のエリートが走る大会とは全く違う」と話す。

完走者を多くしようと、ゴールまでの制限時間を7時間にしたため、日比谷通りや晴海通りは5～6時間半も通行止めになる。警視庁は5000人態勢で、コースと狭い道路との合流点など約600か所を遮断。信号機を調整して環状7号線などの周辺道路からの都心部への車の流入も絞る。都などでは沿道警備に陸連の審判員ら5100人のボランティアを配置する。

沿道への影響も大きい。日比谷通りに面し、北側と西側の通行が規制される帝国ホテル

では、予約時に宿泊客への説明を徹底し、当日はチェックアウトした客を新橋駅に送る臨時シャトルバスも運行する。

ランナーへのサポート態勢も大がかりだ。選手の着替えなどをゴールの東京ビッグサイトまで運ぶのは11トントラック36台。約2・5キロごとに設けられる給水所では、紙コップを並べた段ボール箱を積んでランナーを待ち受ける。意外な弱点になりそうなのはランナー用のトイレで、スタート地点の都庁前には当日、仮設トイレが500基用意されるが、全員が使うと1人1分でも1時間かかる計算で、増設も検討されている。

シューズのひもに通して着けるタイム計測用の「RCチップ」は、5キロごとの通過タイムをセンサーで読み取り、家族や知人も携帯電話で見られる仕組みになっている。

上記の新聞で取り上げているように「3万人」「(制限時間) 7時間」「銀座」「浅草」「観光地」「完走」と言った言葉が多く登場し⁹⁾、今までのマラソン新聞報道とは違っている。競技マラソンとは違い、完走が最優先であるのと楽しんで、気楽にマラソンを捕らえていると言え、また、いろいろな楽しみ方があるので誰でも参加できるスポーツ文化として捉えていると言えよう。また、「石原慎太郎」が多く出ていることは、市民が作り上げた世界五大マラソンと違って東京マラソンは当時の東京都知事が先導で進めていったことであると言えよう。

東京マラソンが始まって現在まで、産経、読売、朝日、毎日四誌とも社会面、東京版で市民ランナーの様子が出ている。注目すべき点は有名人タレント、病人ランナー（がんが多い）か病人を抱えたランナー、失業者ランナー、女性ランナー等にスポットを当てている点である。¹⁰⁾ マラソンは人生に似ている弱者の人もがんばっているから読者もがんばれということであろうか。新聞、TV等に、家族の絆などが見られ、「感謝」「ありがとう」「支える」「声援」といった言葉が多く見られた。¹¹⁾ このことは、マラソンは過酷で、皆の支えがないと走れないということと日本人の集団性、絆と大きく関わっているといえよう。そして、一体感、絆ということが「東京が1つになった」で表されている。

(6) 産経 2008年2月18日 東京朝刊 社会面

【東京マラソン2008】首都を駆け抜けたドラマ 知事「東京が1つになった」

3万2000人のランナーが都心を駆け抜けた17日の東京マラソン（日本陸連、東京都主催、産経新聞社など共催）。トップ選手のほかに市民ランナーや障害を持つ人、有名人が声援を受け、皇居や銀座、浅草などの名所を駆け抜けた。

今年で2回目。フルマラソンの完走率は97・4%で、氷雨が降った昨年を1・1ポイント上回った。昨年、7時間の制限時間を50分オーバーして“完走”した両足義足のランナー、島袋勉さん（44）は今年も挑戦し、制限時間内でゴールした。

「義足と接するひざ下に傷があるのが気かりだけど、順調なら7時間を切れるはず」と、

最後尾からスタート。途中、摩擦でずれた義足を何度も修正しながら6時間28分で堂々のゴール。タレントの萩本欽一さんに「ありがとう」と声をかけられ、満面の笑みを浮かべた。

4年前にがんの手術を受けた鈴木宗男衆議院議員も、2年連続の出場。今年は妻と娘の反対を受けたが、昨年を10分上回る3時間57分でゴール。

(中略)

宮崎県の東国原英夫知事も他のランナーにもみくちやにされながら、笑顔でゴール。タイムは4時間42分だった。「沿道の熱気と『宮崎ガンバレ』の温かい声援に驚いた」と話した。

約1万2000人が裏方のボランティアとして“参加”した。石原慎太郎都知事は「まさに東京が一つになった感じ。来年はより完全なものに近づきたい」と総括した。

9. まとめ

新聞、TV等のメディアは東京マラソンについて、一般参加者や市民ランナーにスポットを当てて取り上げた。そして、新聞、TV等に、家族の絆などが見られ、「感謝」「ありがとう」「支える」といった言葉が多く見られた。このことは、マラソンは過酷で、皆の支えがないと走れないということと日本人の集団性、絆と大きく関わっているといえよう。また、テレビで多くの女子アナウンサー、タレントを登場させ、ランナーとして走らせているのも特徴である。このことが日本人にマラソンの親近感を与えた。しかし、一方で、バラエティ番組化が問題になった。これらは、瀬古、宗兄弟などの台頭によって日本男子マラソン界が強くなりかかっていた1970年代後半の第一次ランニングブームとは違う様相であろう。第一次ランニングブームは、メディアが強いマラソン選手を映し出しているように見えるが、第二次ランニングブームのメディアは、市民、視聴者参加型のものだといえ、新聞、TV等のメディアに出てくる言葉・内容にもそういったことが反映されている。

10. 今後の課題

次のことが今後の課題として残った。

- ① 地域新聞の東京新聞（共催）の東京マラソンの報道がどうなっているのだろうか。
- ② 世界の五大会の新聞報道、メディアのそれぞれのマラソンの報道はどうか。

特に、五大会の一般市民ランナー等のメディアのあつかいは、どうなっているのだろうか。マラソン報道のお決まりの病気を克服しながらマラソン完走、失業にめげずにマラソン完走などのような報道はあるのだろうか。（お涙頂戴の物語は、日本のスポーツメディア報道の特徴だと思うのだが、はたして海外のマラソンの報道はどうであるか）ニューヨークシティーマラソンはがん撲滅のキャンペーンを展開しているので、そういう記事があると思うが内容が日本のものと異なると考えられる。

③ 世界のTVタレント、政治家はマラソンに参加しているかどうか。もし参加しているのならば、メディアはどのくらい取り上げているか。（東京マラソン2008ではタレントの松村がコースの途中で倒れ、テレビ、翌日の新聞の社会紙面等に扱われ、宮崎県元知事や鈴木宗元衆議院が出走したこともテレビやメディアに取り上げられたがどうか。）

④ 2011年以降の東京マラソンとメディア等の更なる考察

2011年以降¹²⁾、東京マラソンの周りが大きく変化した。2011年東日本大震災、2011年チャリティの部開設、2012年に設立者の石原慎太郎氏が東京知事を辞任、2013年ワールドマラソンメジャーズに加入、2013年に東京オリンピック2020開催決定などである。それらと東京マラソンはどう関わっているかは十分考察できなかった。かなり複雑で、述べることが多いので次稿にしたいと思う。

註

- 1) 大島 (2007) によると1975年にボストンマラソンに日本から市民マラソンが多く参加をした。日本陸連はこのことにあまりいい顔をしなかったようである。日本陸連は、彼らを「素人ランナー」などと呼んでいたらしい。話はかわるがいつから市民ランナーと呼ぶようになったのかということ、山中鹿次氏の話によると1977年から市民ランナーの言葉がランナーズに出てきたようだ。
- 2) 芸能人の初期のマラソン参加の代表は高石ともやである。(1977年にホノルルマラソンに出場)
- 3) 2008年東京マラソンは日本テレビアナウンサーがたくさん走ったが週刊新潮 2008年2月28日号などは、マラソンをバラエティ番組化していると述べた。
- 4) 2010ランニング学会大会シンポジウムでクリールの編集長樋口氏は、東京マラソンについてメディアから「タレントは誰が走る、面白いことは何」と聞かれ今までのマラソン大会と異なる質問を受けたと述べている。また、ランナー自身が生中継してネット発信をしているのも注目すべき点だと述べている。一方早野氏(東京マラソン事務局広報部)は、東京マラソンの広報戦略は、女性がターゲットであり、走る女性は素敵で、意図的に内面的な美しさを表していると述べている。そして、早野氏は、女性が増えるにしたがって最近若い男性が増えていると述べている。
- 5) 鈴木宗男氏、東国原元知事も1990年代から走り始めたようである。多くのタレントが1990年以降からランニングを始めている。なお、村上春樹は、1980年前半のころにランニングを始めたようである。
- 6) Gデータベースサービスで「東京マラソン、石原慎太郎」で検索したところ 朝日新聞33件、読売新聞24件、毎日新聞66件、産経新聞107件(2000年1月1日から2014年8月31日までの分)と多かった。
- 7) データベースはGデータベースサービス(<http://db.g-search.or.jp/>)を使用。場合によって、縮刷版(東京)普通の新聞を使った。産経新聞は、縮刷版を作っていない。なお、産経新聞東京版は、夕刊を発行していない。大阪版は発行している。テレビ中継については、東京国際マラソンに引き続きフジテレビと日本テレビが隔年でテレビ放送する。双方の局に関係する衛星放送(BS・CS)でも放送されているほか、ラジオ中継も両局に関連したラジオ局であるニッポン放送・アール・エフ・ラジオ日本が隔年で中継を行っている。第1回(2007年)は選考会の部のみの中継だったが、第2回(2008年)以降はテレビでは関東ローカル・衛星放送限定で一般ランナーの部の最終ゴールまでの中継を行っている(地上波の全国ネットは選考会の部のみ)。本稿では、地上派は全国ネット以外は、原則的に考えなかった。
- 8) 全新聞記事のアンダーライン、網かけは著者が記したものである。(これらの箇所は論考、考察に関係しているので注目してほしいためアンダーラインを記した。なお、見やすくするために7時間、3万人等の語には網かけをした)
- 9) 「東京マラソン、3万人」「東京マラソン、7時間」「東京マラソン、銀座」「東京マラソン、浅草」「東京マラソン、観光」「東京マラソン、完走」「東京マラソン、祭」でGデータベースサービスで検索した(2000年1月1日から2014年8月31日までの分)ところ「東京マラソン、3万人」は、514件「東京マラソン、7時間」は、183件「東京マラソン、銀座」は、285件「東京マラソン、浅草」は、238件「東京マラソン、観光」232件「東京マラソン、完走」は759件、「東京マラソン、祭」は195件であった。(なお、以上の件数は、朝日、読売、毎日、産経新聞の件数合わせてのものである)

- 10) 「東京マラソン、病気」「東京マラソン、失業」「東京マラソン、女性」でそれぞれGデータサービス（2000年1月1日から2014年8月31日までの分）で検索したところ「東京マラソン、病気」は、79件「東京、失業」は、9件「東京マラソン、女性」327件であった。（なお、以上の件数は、朝日、読売、毎日、産経新聞の件数合わせてのものである）
また、「東京マラソン、感謝」「東京マラソン、ありがとう」「東京マラソン、支え」「東京マラソン、声援」をGサービス（2000年1月1日から2014年8月31日までの分）「東京マラソン、感謝」は168件「東京マラソン ありがとう」は82件「東京マラソン、支え」は、298件「東京マラソン 声援」は293件であった。（なお、以上の件数は、朝日、読売、毎日、産経新聞の件数合わせてのものである）
- 11) 市民マラソンの父と呼ばれている有吉正博氏、山西哲郎氏によると海外ではタレント、アナウンサーが走るのを大きく取り上げバラエティ的に扱うのはどうもなさそうだとやっている。
- 12) 2010年日本スポーツ産業学会第19回大会での東京マラソン事務局早崎氏の話によると大会を重ねるとメディアが飽きる必ず何かを変えないと注目されなくなる。だから、年々あたらしいことを試み内容を変えていくことであるようだ。また、この大会でスポーツ社会学の杉本厚夫氏は、なぜ、東京マラソンが31万も応募するのは、挑戦が元気にする、逸脱が元気にする、一体感が元気にするからだと言った。

参考文献

- 川端康生 『東京マラソンの舞台裏』、衛出版社、2008年
遠藤雅彦 『東京マラソン』、ベースボールマガジン社、2008年
大島幸夫 『市民マラソンの輝き ストリートパーティーに花を』、岩波文庫、2007年
『東京マラソンメディアガイド』2007～2010年
『東京マラソン2010』参加プログラム
『東京マラソン2009』参加プログラム
『東京マラソン2008』参加プログラム
『第22回ランニング学会大会』プログラム及びシンポジウムの資料
山中鹿次 「市民マラソン大会と地域活性化—その歴史推移と現状と課題—」『地域活性研究』VOL.1、2010年
「東京マラソンに続け!!大会新設ラッシュの裏側」『週刊東洋経済』2010年5月15日号
「第一回大阪マラソンについて」『日本スポーツ産業学会第19回大会号』日本スポーツ産業学会、2010年
シンポジウム「市民参加型スポーツイベントが地域を元気にする」『日本スポーツ産業学会第19回大会号』日本スポーツ産業学会、2010年
(HPのURL、2014年8月31日採取)
『オールスター感謝祭』<http://www.tbs.co.jp/kanshasai/archive>
『赤坂5丁目ミニマラソン』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B5%A4%E5%9D%82%E4%B8%81%E7%9B%AE%E3%83%9F%E3%83%8B%E3%83%9E%E3%83%A9%E3%82%BD%E3%83%B3>
『ビートたけしのスポーツ大将』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%BC%E3%83%88%E3%81%9F%E3%81%91%E3%81%97%E3%81%AE%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E5%A4%A7%E5%B0%86>
『24時間テレビ☆マラソン 歴代走者の年齢と走行距離』
<http://matome.naver.jp/odai/2131392754465489701?page=2>

